

桜蔭俳話会 三月句会(第三〇三回) 桜蔭会館

平成二十四年三月二十五日(日)

4点②三月の水に全景金閣寺

貞勝

制服もかばんも揃ひスイートピー

貞勝

①うがひ液苦し春鬨せめぎ合ふ

明美

春なかば京劇面の早替り

守

一山の城取り囲む木の芽かな

守

大吟醸越後の桜と名をつけし

佳史

2点①春眠の遠きラジオのとぎれをり

ツル子

露の薑胡麻和え二つ白子鉢

幸

①花の駅また花の駅降り次ぐ

貞勝

公園の常夜灯増ゆ春の雨

秀一

①土筆摘む大地のかつて海の底

守

桜の葉漬け込む樽よ箍美しき

明美

①裏山の墓訪ふ春の影法師

亮司

まどろみて進まぬページ春の雷

ツル子

ゆつたりと雲横切りし桃の花

秀一

所作の良く京の茶席や春なかば

真三

誰もをらぬ庭に気配よ落椿

友子

ヒヤシンス数多な卸留め難く

秀一

ネクタイの結び決まりて入学す

ツル子

やつかいな絆のひとつ春田打つ

明美

陽春やきりんの立ちて動かざる

真三

春うらら手遊びする手柔らかし

ヤエ子

1点①横向きのジャックの絵札鳥雲に

亮司

校庭に散らばる子らの風光る

ツル子

①剪定やしずかに空が降りてくる

貞勝

梅咲くや母の添ひ遂ぐ七十年

友子

就活の服の中なる卒業子

明美

しだれ梅経に聞き入るお寺かな

真三

梅一輪いつはりのなき白さかな

守

場所取りに桜の下を迷いけり

佳史

芽柳やわづかの風も見逃さず

友子

投資とてまだ値の付かぬ山笑ふ

亮司

花芽吹く母の命を惜しみつつ

明美

下町のスカイツリーや草の餅

幸

探梅や足湯のぬくさ残りけり

ヤエ子

薬や曾孫の掌しなやかに

貞勝

花芽より解け始めけり春の雪

友子

やはらかき光返しぬ猫柳

友子

放ちたる赤い風船春の空

真三

寝覚めつつ春雷遠く近くして

佳史

夜の梅ほむら匂ひし能舞台

守

鶯の初音聞きつつ地図を読む

幸

深き闇梅のにはひのただよへり

ヤエ子

三塔めぐるギヤマンの窓春光す

幸

連翹の気ままな黄を許しをり

佳史

すぐ飽きて一人はさびし石鹼玉

亮司

一政の真鶴岬春の潮

幸

ふらここや心変へぬと決めてをり

秀一

畑打の雨吸いし土静まれり

ヤエ子

薔薇の芽のひかりあふるる広さかな

秀一

※観梅の人少なくて雨の降る

ヤエ子

春さざし旅の本寄せ夜の更けて

ツル子

剪定の動物の群れめだたざる

真三

越前の風とや春立つ搾り酒

佳史

赤らみしデコピンの痕あたたかし

亮司

法被着け粹に行列舟渡御祭

幸